

通常学級で学習する
聴覚障がい児童生徒の指導のために



大阪府立生野聴覚支援学校

いくの聴覚言語支援センター(I-DIC)

も く じ

はじめに	1
1. 「きこえ」について	2
①きこえのしくみ		
②聴覚障がいの種類		
③きこえの程度		
④音の大きさ		
⑤「聞く」ことと「話す」ことの関係		
2. 補聴器について	4
①補聴器とは		
②補聴器の管理		
③補聴器のきこえ方		
④補聴器の効果と限界		
3. よりよく聴くために	6
①音環境について		
②FM補聴システム		
4. 学校生活で配慮すること	8
①座席位置		
②話し方		
③情報保障について		
～子どもたちに～		
指文字表		
5. 教科学習で配慮すること	13
①音楽		
②体育		
③水泳		
④学級会		
⑤外国語・英語		
6. 耳のチェック表	17

はじめに

聴覚障がい児童生徒が通常学級で学習するためには、先生の種々の手だてが必要となります。また、まわりの児童生徒にも、なぜそのような手だてが必要なのか正しく理解した上で、聴覚障がい児童生徒と接するよう指導することも大切です。手だてが不十分であったり適切でない場合には、心理的な歪みを持つことになり、心のケアも必要になってきます。さらには聴覚障がい児童生徒自身にどのような力をつけていけばよいか、将来に見通しをもった取り組みが求められます。

この冊子は、はじめて聴覚障がい児童生徒を受け持った先生方のために作製しました。日常指導の手がかりになると思われるいくつかの内容について、手引きとなるように整理しています。

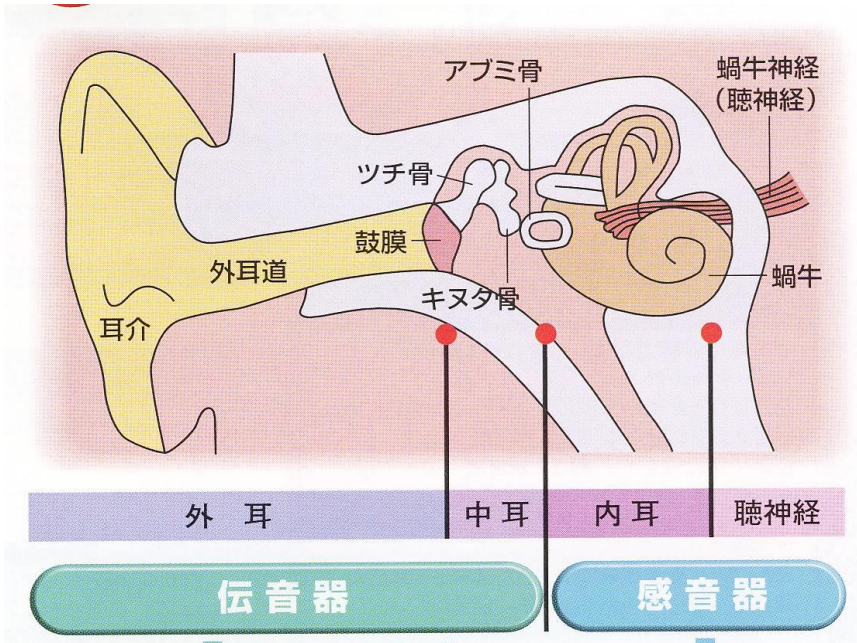
聴覚障がい児童生徒の指導法は、その障がいの内容や程度によって一律ではありません。この手引きを手がかりに、個々のケースに実際に対応し指導を試みて下さい。受け持たれた聴覚障がい児童生徒にとって、より適切な方法が見い出されるはずです。

2019年4月

大阪府立生野聴覚支援学校
いくの聴覚言語支援センター

1. 「きこえ」について

①きこえのしくみ



「普通学級での聴覚障害児の指導」（京都「聴覚障害を考える会」）

	耳 介	音を集める	
	外耳道	音を導く、高い音を増幅する	
	鼓 膜	振動する	伝音器
中耳	耳小骨 (ツチ骨・キヌタ骨・アブミ骨)		
		振動を増幅する	
内耳	蝸 牛	振動を電気信号に換える	感音器
	聴神経	大脳に電気信号を伝える	

②聴覚障がいの種類

- 伝音性難聴 …… 伝音器に障がいのある難聴
- 感音性難聴 …… 感音器に障がいのある難聴
- 混合性難聴 …… 伝音器感音器どちらにも障がいのある難聴

③きこえの程度

「聴力レベル」といい、音の大きさの単位（dB：デシベル）で表します。聴力レベルの数値が同じであっても、聞こえにくい音の高さ（Hz：ヘルツ）は人によって異なるため、個々のきこえの状態は様々です。

難聴の程度	WHOによる 分類基準	日常生活での聞き取りの不自由度	身障者福祉法 聴覚障害等級
正常	25dB 以下	特に不自由なし	
軽度難聴	26～40dB	静かな場所での対面での話や電話では不自由しないが、小さな声での会話で聞き誤ることがある。	無該当
中等度難聴	41～55dB	雑音下では対面でも聞き返しが多く、電話では詳細を聞き誤ることがある。	無該当
準高度難聴	56～70dB	大人数の会議では詳細を聞き誤る。生活音でも聞こえない音が多い。	無該当
高度難聴	71～91dB	大きな話し声は聞こえるが、口元を見ないと聞き誤りが多い。慣れない人との電話は聞き誤りが多い。	6級(70～79dB) 4級(80～89dB) 3級(90～99dB)
重度難聴	90dB 以上	衝撃音以外は、ほとんどの日常生活音は聞こえない。自分の声も聞こえず発声調整するのが困難。	2級(100dB 以上)

普通、聴力レベルの程度によって「難聴」や「ろう」という呼び方がされますが、程度にかかわらず、コミュニケーションに聴覚を主とする場合「難聴」、手話を主とする場合「ろう」と捉える見方もあります。

<学校生活での聞こえ方の例>

軽度難聴

- ・一音一音は、はっきり聞こえない。
- ・知らないことばは聞き取ったり理解したりしにくい。
- ・前後関係や状況を考えながら聞いている。
- ・突然話しかけられたり、不安になると聞き取りにくい。
- ・聞こえているのか聞こえていないのかを自覚するのが難しい。

中等度難聴

- ・会話を聞きのがす可能性が高い。
- ・発音や声質の歪みが起きやすい。
- ・コミュニケーションや交友関係に影響が出る可能性がある。

※きこえの程度に応じて、補聴器を使う児童生徒も多くいます。

④音の大きさ

音の大きさはきこえの大きさでもあります。新聞をめくる音は約 30 dB、普通の会話は 50 dB、叫び声は 90 dB、自動車のクラクションは 110 dB、ジェット機のエンジン音は約 120 dBで耳が痛くなる音です。



⑤ 「聞く」ことと「話す」ことの関係

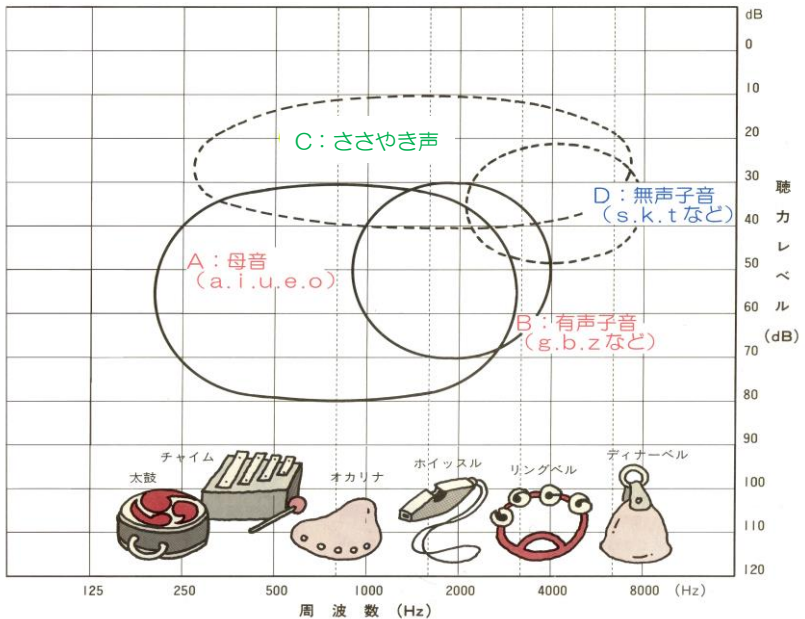
「聞く」力は、「話す」こととも関係があります。なぜなら、自分の出した声がか人にははっきりと伝わる言葉になっているかどうか、耳で聞くことによって確かめているからです。



聴覚障がいがあると、自分が正しい発音で話せているかどうか分からないため、相手に伝わりにくいことがあります。

聴く側の人が正しく置き換えてあげましょう

日本語の語音の分布



「こどもの補聴器」(母と子の教室)より

「聞く」ことは、言葉を身につけることにも関係します。一般的な発達段階では、1歳くらいで言葉を話し始めます。特に努力をしなくても自然に話せるようになります。それは、耳で言葉を聞くことができるからです。生まれた時から周りの人がしゃべっているのをたくさん聞き、日本語の音や単語を覚え、やがて言葉が口から出てくるようになります。

聴覚障がいがあると耳から入ってくる言葉の情報が少ないため、言語発達やコミュニケーションなどに二次障がいが見れることがあります。

2. 補聴器について

①補聴器とは

補聴器は、音を増幅する機械です。補聴器を装用する際には専門医の診断が必要で、聴覚障がい児童生徒それぞれの状態に合ったものを選ぶようにします。補聴器は騒音や雑音なども増幅してしまうため、人の声を聞き分けられるようになるには、訓練と慣れが必要です。

人工内耳という、手術で内耳に細い電極を挿入し、音波を電気信号に変えて直接内耳の聴神経を刺激する機器もあります。

②補聴器の管理

補聴器は、高性能の精密器械です。高いところから落とさない、湿気を避ける等の注意が必要です。

補聴器は、電池で動いています。電池は数日でなくなるので、予備の電池を持ち歩くことは常識となっています。

補聴器は、マイクとレシーバーが近接した造りになっています。成長とともに耳の穴も大きくなり耳栓との隙間から音が漏れ、増幅された音をマイクが拾いさらに増幅するいわゆるハウリング現象が起きてしまいます。そのため、ふつう耳栓の代わりにイヤモールドをつけます。わずかでも「ピー」と鳴っている時はハウリングしており、まわりに迷惑であるだけではなく、補聴器は正しく機能していないと考えられます。本人に気づかせ、イヤモールドを指先で少し押すだけで止まることが多いです。それでも直



らない時は、補聴器業者に見てもらいましょう。

イヤモールド：自分の耳穴の形状に合わせた樹脂で作られた耳栓



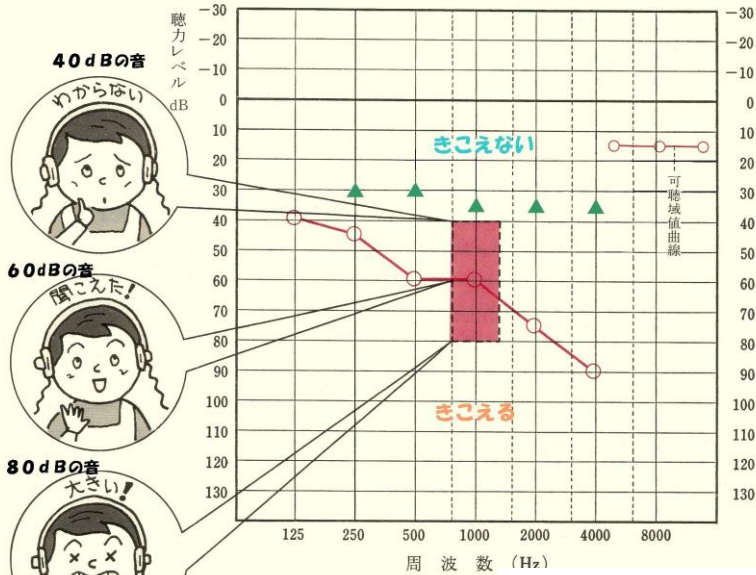
イヤモールド

③補聴器のきこえ方

補聴器で音を大きくし、○の状態から▲の閾値まで聞こえるようにします。下記の例では、補聴器のはたらきで1000Hzの音が35dBの大きさまで聞こえます。（この場合、補聴器によって25dB改善されています。）

【例：右耳】

〈オーディオグラム〉



「音の世界へ」(母と子の教室)より

③補聴器の効果と限界

補聴器は、近くで会話するように造られ調整されています。距離が離れると話者の音声を拾うことは難しくなり、通常の効果は見込めません。大きな声で話すよりも一歩でも近づいて話すようにしましょう。

補聴器は、騒音や反響のある場所ではたいへん聞きづらいものです。聴覚活用のためにはできるだけ静かな環境にするなどの配慮が必要です。



3. よりよく聴くために

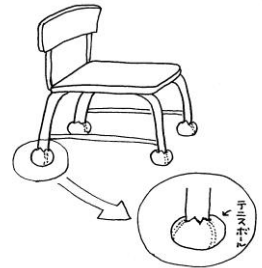
①音環境について

できるだけ静かな環境を作りましょう

多人数の子どもの机やイスの4本の足に、使い古しの硬式用テニスボールを取り付けることは、騒音を減らす有効な手だてです。最大の騒音は、聞き取りたい話者とは関係のない周囲の話し声です。

反響を弱くするための工夫

コンクリートなどの硬い素材の床や壁で囲まれた部屋では、残響音が重なり、とても聞きづらいものになります。床にカーペットがあつたり、壁にカーテンを引くなどするだけで改善できます。



②FM補聴システム

通常の補聴器は、話者との距離が離れると音圧が減衰し聞き取りにくくなります。そのため、FM電波のワイヤレス機能を補聴器に用い、この問題を改善したのがFM補聴システムです。

話者が持つ送信機（マイク）と聴覚障がい児童生徒が装用する受信機の2つで1組になっています。通常補聴器のマイク部分が、話者の持つマイクになったと考えてよいでしょう。その分、話者のマイクが拾う音について十分な注意が必要となります。授業の中で、FM補聴システムを有効に活用する工夫が必要です。



また、電波信号が使われていますので、使う教室によって不安定な場所があります。十分な事前調査をした上で使うようにしましょう。

2013年には Bluetooth を使った新しい補聴システムも開発されました。

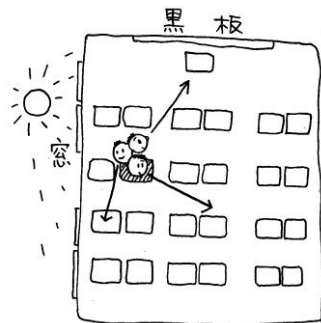
4. 学校生活で配慮すること

「しゃべることができる子=発音のよい子」の場合、「聞こえている」と誤解されやすいため、特に注意を要します。

以下に述べる配慮事項は、聴覚障がい児童生徒以外の他の障がい（軽度発達障がいを含む）児童生徒にも有効な場合があります。

①座席位置

聴覚障がい児童生徒は、話者の口の形、唇の動き、表情を頼りにして、ことばを読み取ります。先生の顔や友だちの顔が見えやすい前から2、3番目で、逆光にならない窓際がよいでしょう。利き耳がある場合には、そこから聞こえるような位置にしましょう。



聴力が厳しくFM補聴システムがない場合には、思い切って教卓の前の最前列にして、時々後ろの友だちの様子を見ると言うのもひとつの方法です。一年中同じ位置になりやすいので、心のケアを必要とします。

②話し方

話す時は、必ず子どもの方を向いて話して下さい。ややゆっくり目で自然な話し方がよいです。一音ずつ区切り極端に遅い話し方は、ことばの調子を崩すためかえって分かりづらいです。フレーズごとに区切りを入れると、曖昧な聞こえであっても言ったことばが理解できることがあります。



ゆっくり話すすとわかりやすい



ことばを区切るとわかりやすい



③情報保障について

キーワードを文字で提示する

聴覚障がい児童生徒は、人と話す時に話者がどんなことを話すのか不安な気持ちを持っています。最初に、何について話すのか、キーワードを提示することで安心でき、伝わりにくいことばも理解しやすくなります。板書や紙に書いて、確実に伝わるようにします。

初めて出てくることばも、必ず板書で確認しましょう。

視覚教材を多く使用する

聴覚障がい児童生徒は、視覚を通して多くの情報を得ます。具体物や絵を見せて話すと、内容や状況が正しく理解されやすくなります。

手話や指文字を使う

指文字や手話を知っている児童生徒であれば、キーワードや初めて出てくる言葉も指文字で一音ずつ確かめることで正確に伝わります。馴染みのうすい言葉やわかりづらい言葉も、その場で簡単に確認できます。

よく使うことばは、手話によってよりよく伝わります。

指示が伝わったかどうか確認する

聴覚障がい児童生徒に「分かった？」という確かめの声かけは、分からない場合でも「分かった」と答えますので、適当ではありません。「分かったことは何？」と聞き、内容の確認をする方が良いでしょう。同時に、指示通りに動くかどうかを見届けることも大切でしょう。



キーワードを示す



視覚教材を使用する



内容を確認する

グループ活動のときには

子どものグループの中で、情報保障の工夫をするよう指導してください。対等なつながりの中で、近くにいる級友が自然にやりとりできることが理想です。互いに助け合う雰囲気は漂う学級集団作りがカギとなります。

～子どもたちに～

なぜ先生はマイクをもって授業しているのか、なぜ聴覚障がい児童生徒の座席位置が同じなのか、なぜテニスボールを机の脚にとりつけているのかなど、日常の手だてや配慮について、きちんとした説明が必要です。学年に応じて、聴覚障がいの正しい理解のための指導が必要となります。

○きこえへの理解を深めるために

体験は有効な手段です。話者の声が小さかったり、騒音下で聞き取ることの難しさを実感できるはずです。できれば補聴器の音を実際に聞かせたいものです。

○手話、指文字を知る

手話や指文字を使ってコミュニケーションすることは、聴覚障がい児童生徒を理解するきっかけとなります。聴覚障がい者の「ことば」である手話について、学年全体で取り組みたいものです。聴覚障がい児童生徒が先生となって手話学習することで、理解が大きく進むケースもあります。また、聴覚障がい児童生徒自身の自己認識(障がい認識)にも好影響を与えます。



補聴器で音を聴く体験

指文字表

あ a 	い i 	う u 	え e 	お o
か ka 	き ki 	く ku 	け ke 	こ ko
さ sa 	し shi 	す su 	せ se 	そ so
た ta 	ち chi 	つ tsu 	て te 	と to
な na 	に ni 	ぬ nu 	ね ne 	の no
は ha 	ひ hi 	ふ fu 	へ he 	ほ ho
ま ma 	み mi 	む mu 	め me 	も mo
や ya 	ゆ yu 	よ yo 	ぼ (鼻指) bo 	ぽ (鼻指) po
ら ra 	り ri 	る ru 	れ re 	ろ ro
わ wa 	を wo 	ん n 	こ (唇指-物指) ko 	一 (唇指) 一 (唇指) ichi

T.T

5. 教科学習で配慮すること

①音楽

聴覚に障がいがあっても、鍵盤ハーモニカなどの楽器を練習すれば上手に演奏できるようになりますし、ピアノを上手に弾く子もいます。重度の聴覚障がいがある場合、歌うときに音程がとりにくく一本調子になる傾向がありますが、リズムはきちんととることができます。中等度、軽度の聴覚障がい児童生徒では、音程をはずさないで歌える子もいます。カラオケを楽しむ聴覚障がい者も多いです。



- ・歌唱より楽器演奏の方が参加しやすい。歌唱や楽器演奏の拍子を取り、始まりを指示する。
- ・歌唱の場合、歌詞をわかりやすく示す。手話などの身体表現を取り入れたりして、歌や音楽を楽しめるよう工夫する。
- ・太鼓など打楽器の大きな音を、補聴器をつけた耳で聞くのは、耳にとってよくないので、ボリュームを下げたり、スイッチを切ったりするようにする（合唱や鍵盤ハーモニカ、リコーダーだけの演奏の時は問題ありません）。



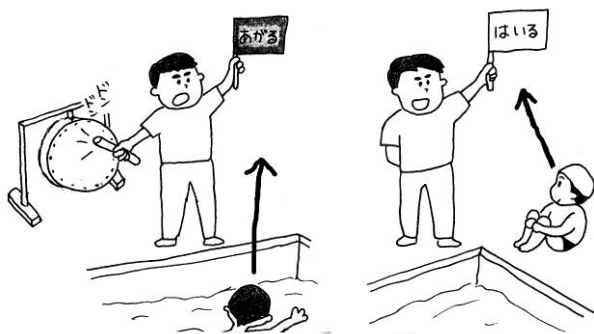
②体育

- ・運動中、特に問題がなければ、できるだけ補聴器をつけておく方がよいです。マット運動など逆さまになるものでは、補聴器がはずれることがあるので、予めはずす方がよい場合があります。組み立て体操など、安全上からはずすこともあります。（※外した補聴器はケースに入れてきます。）
- ・補聴器が汗でぬれた場合、乾いたタオルなどでふき取る習慣をつけるよう指導してください。

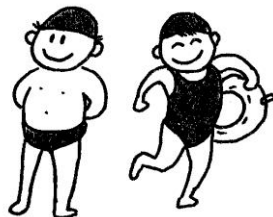


③水泳

- ・補聴器は着替えの時に耳からはずし、ケースに入れてください。
〔一年生のはじめてのプール学習の時、補聴器をつけたままシャワーを浴びてしまったなどの失敗談もあります。必ず確認しましょう。〕
- ・ホワイトボードなどを使い、先生の指示が目で読み取れるようにします。
- ・安全に関しては、事前に説明しておきます。その際、聴覚障がい児童生徒が理解しているかどうか確かめてください。
- ・「水に入る」「水から出る」の合図は、鐘やホイッスルよりも太鼓がよいです。紅白旗の使用も有効です。



軽度の聴覚障がいの場合でも、補聴器をはずすと肉声は届きにくくなります。



④学級会

聴覚障がい児童生徒は、話し合いの過程を抜きにして結論だけ聞かされる傾向があります。子どもの発言は、席が離れていて声が届きにくく、また不明瞭になることが多くなります。FM補聴システムや手話などの情報保障があると随分ちがいます。

- ・話し手がよく見える位置を配慮する。
- ・話し手を見ていないようであれば、見るように促す。
- ・場合によっては、先生が分かりやすく復唱する。
- ・同時に複数が発言せず、発言前には挙手するなど、話し手が誰なのかわかるように配慮する。



⑤外国語・英語

聴覚障がい児童生徒にとって外国語の学習は、様々な教科の中でも難しいもののひとつです。近年、英語学習を国際理解やコミュニケーション活動の視点で捉え、音声を中心にリスニングやオーラルスピーチを主

体に学習を進めていく形に変わってきています。難聴の児童生徒にとっては難しい課題です。先生の指示がわかりにくいところへ、英語で指示されたりするとさらに聴きとりが困難になります。

外国語活動・英語学習においては、その出発点が第一のつまずきになることが想像されます。最初に苦手意識を持ってしまうと、その後の学習も楽しくはならないでしょう。

- ・英語の発音の理解のため、ルビなどの視覚的な支援をする。
- ・聴覚の保障（FM補聴システムの活用や学習環境の整備など）をする。
- ・学習時にフラッシュカードやプレゼンテーションソフトなどを用い、音声情報と同時に視覚情報を保障する。

※外国語活動・英語の学習を始める前に、しっかりと日本語の語彙数を増やしておくことが必要です。国語力をしっかり身につけておくことがなによりも大切になります。

学習を開始する時には、簡単で児童生徒がよく知っているような単語や文を使って、英語と日本語の発音の違いなどを事前に学習しておく必要があります。

例えばbookとbootsでは母音が異なりますし、子音ではc→[k]、sやph→[f]などのように、同じアルファベットでも発音が異なったり、発音と同じなのにスペルが違ったりすることがあります。

英語は表音文字のアルファベットで表記されますが、母音・子音ともに発音の規則性がわかりにくいのです。初めに細やかな指導をしておく必要があります。

また、アクセントなども同時に学習し、発音もできる限り正確にさせてください。日本語の発音の上手な子どもであれば、他の子どもたち以上に英語の発音が理解できることもあります。

6. 耳のチェック表

耳のチェック表 (年 月現在)

学校名	学年	氏名	裸耳	補聴器 装用閾値	vol 数值	人工内耳
			右 左	右 dB 左 dB		右 dB 左 dB
補聴器業者	身障者手帳	療育手帳	病院 (耳鼻科)			主治医
	有 級 無	有 無				
補聴器	メーカー名	器種	シリアル番号	購入年月日		イヤモールド 作成年月日
			右 左			
人工内耳	メーカー名	製品名	番号	購入年月日		備考
			右 左			
FIM 補聴 システム	会社	製品名	製品名			購入年月日
生年月日	障がい名	障がい発見時年齢	就学前機関	病院 (小児科等)		主治医

編集・発行：大阪府立生野聴覚支援学校 通級指導教室
イラスト：大畑 むつみ（旧生野聾学校職員）

2005年（平成17年）6月初版発行
2007年（平成19年）4月改訂版発行
2008年（平成20年）4月改訂版発行
2009年（平成21年）4月改訂版発行
2013年（平成25年）4月改訂版発行
2014年（平成26年）4月改訂版発行
2014年（平成26年）6月改訂版発行
2019年（平成31年）4月改訂版発行

図は以下から一部参照、引用

- ・「普通学級での聴覚障害児の指導」（京都「聴覚障害を考える会」）
- ・「こどもの補聴器」（母と子の教室）
- ・「音の世界へ」（母と子の教室）
- ・「FM補聴器の使い方」（大阪府立堺聴覚支援学校）
- ・「言語聴覚士のための聴覚障害学」（医歯薬出版株式会社）

文は以下を参照あるいは一部引用

- ・「普通学級での聴覚障害児の指導」（京都「聴覚障害を考える会」）
- ・「言語聴覚士のための聴覚障害学」（医歯薬出版株式会社）
- ・「ふしぎだね！？聴覚障害のおともだち」（ミネルヴァ書房）

連 絡 先

大阪府立生野聴覚支援学校

〒544-0034 大阪市生野区桃谷1丁目2番1号

TEL 06-6717-3366(代) FAX 06-6717-5865

E-mail tukyu2@ikuno-r.osaka-c.ed.jp

HP <http://www.osaka-c.ed.jp/ikuno-r/>

